

# ジャン・ポーランにおけるマダガスカル

—言葉の力を巡る発見について—

加 覧 咲

## はじめに

ポーランにとってマダガスカルの経験がどれほど重要なものであったかということは、彼自身でその意味を見出すために費やした約30年という歳月の長さが物語っているだろう。1908年1月から1910年11月まで約3年に及ぶ滞在期間を終えてから、1939年に最後の講演<sup>(1)</sup>を行うまで彼は多くの記録やエッセイを残し続けた。それほど長い間幾度も彼を再考に向かわせたのは、まさに言語についてのある発見だった。マダガスカル中央部に住むメリナ族と生活する中、彼らの使うことわざや民衆詩ハインテーニを学びながら気づいたことである。ポーラン自らが治癒を待つ病に例えている<sup>(2)</sup> その発見の捉え難さは、マダガスカルの話にとどまることなくそれ以降の思索の基底に浸透しているように思われる。

ただしそれは予期されていたことではなかった。マダガスカル行きはそもそもポーランの積極的な選択だったわけではない。当時ソルボンヌの学生で学位論文の準備段階にあり身の振り方に悩んでいた頃、哲学教授資格試験に挑戦するも落第したばかりで、4年かけて学んだ中国語を活かし中国で教授になるという夢<sup>(3)</sup>も潰えたというところに、期せずして舞い込んできた話だったのだ。それは現地の総督オガニユールからの提案で、首都タナナリヴに新設される外国人中学校の文学担当教授<sup>(4)</sup> 職の勧めであった。すなわち、現地のフランス人に本国と同様の教育を受けさせるための植民地官吏としての仕事である。それはポーランにとって、将来的な安定は見込めないが、学位論文の準備に必要な資金集め<sup>(5)</sup> をする一時的な手段としては都合の良いものだったのかもしれない。

しかし本当に出発の真剣な理由など何もなかったのだろうか。たしかにそれは、のちに説明するような言語の体験が目指されていたからではなかった。それでも経済的理由だけだと言い切れそうにないことは、すでに様々な論者が指摘してきたことでもある。家族からの解放<sup>(6)</sup>、フランス社会からの逃走<sup>(7)</sup>、あるいは恋人ローザからの逃避<sup>(8)</sup> など幾つかの可能性を挙げることができるが、ポーランの場合逃走への意志とは、異なる思考のあり方に対する希求でもあった<sup>(9)</sup>。初めのうちそれは、やはり言語学的興味に基づくものだったと言えるだろう。1911年には、「16、7歳頃に中国語を学ぶことに決めた」<sup>(10)</sup> 時のことを振り返りつつ次のように述べている。

Mais quand je compare à d'aussi minces avantages la pénible nécessité d'apprendre deux mots là où je n'ai qu'une idée et de me répéter pour ainsi dire en plusieurs langues [...] alors il me vient la plus grande envie de renoncer à tous les progrès dont on m'accable, de cultiver mon esprit plutôt que ma mémoire [...] ou du moins si je fais choix d'une langue étrangère, de la choisir assez lointaine et différente de la mienne, je ne dis pas seulement dans les objets qu'elle distingue mais dans les démarches même dont elle les distingue, pour que je sois au moins assuré qu'elle n'aille pas pour moi sans pensée, et bref sans différences et sans surprises continues.<sup>(11)</sup>

しかしこの些細な利点に対して、一つの考えしかないところで二つの語を覚え、いわば幾つかの言語で同じことを繰り返す辛い必要性を比べると、[...] 散々聞かされる進歩なるものを諦め、記憶よりもむしろ私の精神を養おうという最も大きな欲求が生じてくる。[...] あるいは少なくとも、もし外国語を選択するなら、私たちの言語から十分隔たり異なっているもの、それが示す対象においてだけでなく、対象を指し示す仕方においてもそうであるような外国語を選びたいのである。そうすれば少なくとも私にとって、思考なしに、つまり相違と絶え間ない驚きなしには、上手く扱えない言語であることが保証されるだろう。

中国語のみならずマダガスカル語に対しても、ポーランが同様の期待を抱いていた可能性は十分に想像できる。実際、帰国後東洋言語学校で行われた講義の中で、「マダガスカル・マレー語に欠かせない精神の習慣」<sup>(12)</sup>の興味深い点を挙げ、言語学習の醍醐味として紹介しているのだ。例えば、多くのヨーロッパ言語においては主語となって中心的な役割を果たす「私」が、マダガスカル語においては基本的に補語として機能し、それに加えて能動動詞よりも受動動詞のほうが主流であるという文法的な特徴に、フランス語とは別の思考のあり方が反映されている<sup>(13)</sup>と言う。ただし、そのような魅力は、あくまでもマダガスカル語とフランス語との違いに起因するものであり、ポーラン自身の思考のあり方との違いに基づくものではなかったことを付け加えておかなければならない。というのも、マダガスカル語の方がフランス語よりも自然で話しやすく、フランス語の方がむしろ外国語のように感じられることに気づいたと回想している<sup>(14)</sup>のである。

では、ポーランが30年間囚われ続けるほど捉え難く感じたのは、いったい言語についてのいかなる発見だったのか。その発見をめぐる彼の思索はどのように変化してきたのか。本稿ではこうしたことを探ってゆきたい。

## 1

ポーランの目にマダガスカルがどう映ったかということと同様に、ポーランがマダガスカルに向けた視線がいかなるものだったかを問うこともまた重要である。入植者としての視線なのか、探検家としてのそれなのか、あるいは視線を向けることはなかったのか。

ポーランが自分の視線のあり方に自覚的になろうとし始めたのがいつのことか定かではないが、マダガスカル人からどう見られているかを意識したことがきっかけとなり、それについて考え始めた可能性はあるだろう。到着して間もない頃、周りから見れば植民地官吏であることが明らかな自分の外見を自覚し、彼は戸惑いを覚えている。

[...] j'ai parcouru à pied l'Emyrne entière ; je recherchais les villages éloignés des routes, et les paysans dont la vie s'était écoulée dans ces villages : tous m'accueillaient courtoisement. Aussi bien éprouvaient-ils la soumission où je me trouvais vis-à-vis d'eux. Il arrivait qu'ils fussent flattés. La bizarrerie de mon attitude ne les surprenait pas trop, qui attendaient d'un Européen toutes les bizarreries. Je pouvais assez loin cette soumission : je tenais à ne point profiter des avantages que m'eût naturellement donnés mon état : je me privai du plus sensible de ces avantages en m'interdisant, durant la première année, de recourir à la lecture ou à l'écriture.<sup>(15)</sup>

[...] 私はイメリナ地方全域を歩いて回った。通りから外れた村やそこで人生が過ぎてゆくような農民たちを探した。誰もが皆丁寧に私を迎えてくれた。というのも、私が彼らの目の前にいると、彼らは服従の感覚を抱くからなのだ。ときには彼らのほうがへつらわれる側になることもあった。私の態度のおかしさは、ヨーロッパ人にまったくのおかしさを想定している彼らをたいして驚かせはしなかった。私はこの服従の感覚を遠くへと押しやった。自分の地位によって自然と与えられる優位性を少しも利用したくなかった。最初の一年間は読み書きに頼ることを自分に禁じることで、そうした優位性のうちももっとも明白なものを断つことにしたのだ。

このようにして、ポーランは入植者としての視線のあり方を意識的に遠ざけようとした。ここで言われている「優位性のうちももっとも明白なもの」は、後続の部分で、マダガスカル語習得における「母語の習慣」<sup>(16)</sup>とされているように、彼はできる限り偏見を持ち込まないように配慮したのである。つまり読み書きを禁じ「文章と同時に事物を知る」<sup>(17)</sup>必要を自分に課すことで、フランス語と比較するプロセスを経ずにマダガスカル語を学ぼうとしたのである。

では彼はフランス人であることを忘れ、距離を無化することで彼らに同化しようとしたのだろうか。現地のマルザック神父のようにマダガスカル人とフランス人の間には何の違いもないと結論づけた<sup>(18)</sup>のだろうか。マダガスカル語も上達し現地の生活にも慣れてきたポーランはたしかに、いかなる「ぎこちなさ」もなしに彼らと感情や思考を「共有」できるようになったと語っている<sup>(19)</sup>。しかし、このように自らの「優位性」を捨て去り、ひとり身を投げ入れるようにしてマダガスカル社会に飛び込んだポーランは、同じ目線から彼らを見つめようとして、本当に見つめるべき違いを発見することになる。

もともと言語学的興味を強く抱いていたからか、到着後一ヶ月が経過する頃にはすでにマダガスカル語を積極的に学び始めており、その美しさに魅力を感じていた<sup>(20)</sup>。しかし、遅くとも1909年の夏頃から始めた、ハインターニという詩のやり取りによって対立を調停する文化、あるいはことわざを使用する文化の探究には、本業である教職を疎かにするほど熱中していた<sup>(21)</sup>。マダガ

スカルのメリナ族は、揉め事が起きるとことわざを使って口論を行ったり、聴衆に囲まれる中、ことわざを要とする詩ハインテーニの掛け合いを行ったりして勝敗を決定し争いを調停する文化を持つ。ポーランはその様子を実際に目にしていたし、また時折彼自身も参加した。古い書籍や文献を調べ、長老を訪ねて、ハインテーニやことわざの収集および調査を繰り返していた。ことわざだけでも集めた数は3000句以上に上る<sup>(22)</sup>という。

ポーランが発見したマダガスカル人との違いは、このようにことわざを日常的に使用する文化に関わっている。ただし、滞在中に自問していた可能性はあるとしても、そのことが明確に言語化されるまで帰国後約15年の経過を待つ必要がある。その間、ことわざやハインテーニに対する関心のあり方は変化し、それに伴ってマダガスカルにおける経験の意味も捉え直され、変化していった。

滞在中に収集・調査したことわざについて、ポーランはまず学位論文を計画する。紆余曲折を経て、最終的には1912年1月に、レヴィ＝ブリュールに「ことわざの意味論 *Sémantique du proverbe*」を、アントワヌ・メイエに「マダガスカルのことわざ文の言語学的分類 *Essai d'une classification linguistique des phrases proverbiales malgaches*」をそれぞれ主題として提出している。このように言語学的にマダガスカルのことわざを分析する試みと、1913年に出版された『ハインテーニ、マダガスカルの民衆詩 *Les hain-tenys, poésie populaire malgache*』のように民族誌学的に考察を行う試みの両方を実践していた。

とりわけ重要な変化が表れるのは、1922年から1923年にかけて「ことわざの意味論」執筆途中に書かれた「考察 *remarques*」である。というのも、バイユーも指摘するように<sup>(23)</sup>ここでポーランが自身の「幻想」に気づいているからである。それまでの調査は民族誌学的な記録の域を出ないものであり、マダガスカルのことわざやハインテーニの持つ、外国人には容易に理解しがたい文化的背景を詳細に説明したものにとどまっていた。もちろんそれ自体、価値のある調査である。しかしこの「考察」が重要なのは、対象であるマダガスカルのことわざについて考えていたはずが、主体であるポーラン自身の考え方のほうがむしろ揺さぶられるという事態が起きているからなのだ。つまり、彼がことわざや常套句について抱いていた前提が通用しなくなったのである。言い換えるなら、その前提も「幻想」の一つに過ぎないことが判明したのだと言えよう。

「考察」は幻想の判明によって、10年以上試行錯誤を繰り返してきた「ことわざの意味論」の行き詰まり、および新たな問題の所在が明らかになるところでもある。その冒頭部分はポーランの嘆きから始まっている。

J'ai pensé longtemps que cette *Sémantique* s'achèverait par un éclair nouveau, pareil à ceux que j'ai déjà connus. Il me semble aujourd'hui que je n'en sortirai pas triomphalement [...] en se prolongeant, cette thèse finit par ressembler à une maladie ou à un remords.<sup>(24)</sup>

私は長いこと、この『意味論』が、すでに知っているような新たなひらめきによって完成されると考

えていた。今では、それを誇らしく終えることはできないように思われる。[...] 長引いて、この学位論文は病や後悔となって終わるのだ。

「意味論」を完成に導くはずだった「ひらめき」のうち、重要な二点は以下の通りである。

- 1 : 「ことわざになるのは論拠の影響力である<sup>(25)</sup>」
- 2 : 「意味とは構成された事実であり、分析可能なものである<sup>(26)</sup>」

幻想はこのひらめきに関わっている。ポーランによれば1は、影響力のある論拠が発展してことわざになるのであり、全てのことわざは「古びた論拠」であることを示している。これに関しては、ことわざは論拠に還元できないとして否定している。つまり、ことわざは論拠であるか否かにかかわらず、まず「基本的事実」<sup>(27)</sup>であって、論理的正当性がないのに影響力を持つ不思議なものということだ。たしかにことわざと論拠の区別はつきにくい。ことわざは論拠であることにしてしまえば、その影響力も実用的な性格のものとして理解できる。しかしポーランはこうして、ことわざと論拠を厳密に区別し、前者の影響力の謎に気づくことになる。2の検討に移ろう。これはすなわち、事実であることわざはそれ自体で意味を生成することができず、必ず「普通のフレーズ」との関係において意味を作り出すということである。ことわざの字義通りの意味とは別に、言外の意味は「普通のフレーズ」で説明される必要があるということだ。このひらめきは否定されないが、そもそもことわざの意味を考える場合どこに難しさの核心があるのか分からなくなり<sup>(28)</sup> 保留されることになる。ポーランの考察は、ある成句の意味を、それを構成する各単語の意味の集合と見なすことが困難であると示し、「私は馬鹿だ。その通り、意味とは何かもはや分からなくなってしまった」<sup>(29)</sup> という戸惑いに終わっている。こうしてポーランは、ことわざの意味の謎に気づく。

このようにことわざの影響力と意味について考え直す必要に迫られたポーランが、一度学位論文の執筆に区切りをつけ<sup>(30)</sup>、別の形で検討を続けるようになったことに注目すべきであろう。それはおそらく、「意味論」という言語学的観点の限界に気づいたということでもあるはずだ<sup>(31)</sup>。ここで詳しく述べることはしないが、ブレアルやダルメステールに対する批判的見解が目立つようになるのもちょうど同じ1920年代前半なのである。「考察」で明らかになった幻想が、ことわざの影響力をその論理性に還元し、その意味をある集団内での約定に基づくものとするところだったと考えれば、「考察」以前のポーランはことわざを通常の常套句として捉えていたと言える。つまりここで、普通そう信じられているような、定着し意味が固定されやがて記号となる運命を辿る常套句とは異なるものとしてマダガスカルのことわざの捉え直しが始まったことと、言語は記号であると考えたブレアルやゲルモンを批判し言葉そのものの持つ力と意味についての問い直しが行われたこととが、同じ動機に基づいていると想定することが可能になるのだ。言い換える

なら、マダガスカルのことわざの、記号となる運命を逃れ続ける不思議な性質こそが、言語は記号ではないというポーランの主張を要請することになったと思われる。彼が1919年にエリュアールに宛てた手紙からも、その可能性を窺い知ることができる。

Il m'a fallu pour retrouver le proverbe, contre Gourmont ou de Gaultier et les autres critiques de langage que j'aimais, tout l'amour que j'ai pour les Malgaches.<sup>(32)</sup>

かつて私が好んでいたような、グールモンやゴーチエその他の言語批評に抗してことわざを再発見するためには、マダガスカル人に私が抱く愛のすべてが必要だったのです。

それはグールモンやゴーチエに対する批判というだけでなく、やはり何よりもまずポーラン自身にとっての再発見だったのだ。もし仮に、ここで言われている「愛」が、マダガスカル人を見つめようとする中で自分自身の視線のあり方を一旦見失ってしまうことだとするならば、その先で見えてきた彼らとの違いこそが、ポーランをことわざの再発見へと導いたと言えるのかもしれない。

## 2

「考察」の約3年後に、その一部を引き継ぎつつ<sup>(33)</sup>エッセイとしてまとめられた『ことわざの経験』(1925)は、滞在中、ポーランがマダガスカル人と同等にマダガスカル語を使えるようになってゆく過程において直面した困難を回想したものである。

その困難に直面したのは、現地到着後少なくとも1年が経過して、マダガスカル語も十分習得し、マダガスカル人と心を通わせることにはいかなる「ぎこちなさ」も感じなくなった頃のことである。

Alors que je savais déjà me servir de la plupart des phrases qui revenaient dans les conversations de chaque jour, je commençai seulement d'avoir le sentiment que mon langage différait de celui des Malgaches : la richesse de mon vocabulaire n'était pas ici en cause, ni la correction de ma syntaxe [...] mais il me semblait plutôt qu'il manquait à mes paroles un certain poids, une valeur, un ton de conviction.<sup>(34)</sup>

日常会話で繰り返し使われるようなフレーズの大半はもう使えるようになったのに、私の話す言葉がマダガスカル人のそれと違っているような感覚を抱き始めていた。語彙の豊富さも、構文の正誤も問題ではなかった。[...]しかし、それよりもむしろ、私の言葉にはある重み、価値、あるいは確信の調子が欠けているように思われた。

「重み」、「価値」、「確信の調子」とはすなわち、言葉の持つ、聞かせる力<sup>(35)</sup>のことである。ポーランがこうした欠点を自分の言葉に感じるのには、特にことわざを使用するときのことだ。先述の

とおり、マダガスカルの子ナ族は些細な口論であってもことわざを用いて解決する習慣をもつため、常に勝敗の決定要因となることわざに聞かせる力を持たせることができるか否かは重要な問題になる。ポーランは、そうした力を持つことわざには「威信 *autorité*」が付帯し、「影響力 *influence*」を発揮するようになると述べる。

問題になるのは、この「威信」はどこからやって来るのかということだ。まずそれは普通のフレーズと明らかに異なる特徴に由来していると仮定される。例えば、議論の最後に必ず現れ「歌のリフレイン」のように期待されるものであるとか、それまでの議論の流れを断ち切って異なる主題を持ち込むような不思議さや突飛さ、あるいはそれを口にする人の声色がまるで事故や死を宣告するときのように重大さを感じさせるものになることなど<sup>(36)</sup>である。しかし、こうした外的な特徴は、ことわざの「威信」と「影響力」の理由として不十分であると指摘される。というのも、マダガスカルのことわざの中でも比較的普通のフレーズに近いもの、「尊敬は買える *le respect s'achète*」や「嫁をもらうや否やたちまち離婚する *il n'a pas plus tôt pris femme qu'il court divorcer*」などを会話の中で使われても、ポーランはその「影響力」どころかそれがことわざであることにすら気づくことができなかった<sup>(37)</sup>からだ。そこで今度は、「影響力」と「威信」の理由をことわざの意味の方へ求めることになる。

ことわざの意味とは通常、その文字通りの意味とは別に、それが使用されている集団において定着した共有可能な意味を指す。しかしマダガスカル人は、そうした常套句としてことわざを見なしていない。驚くべきことに、文脈から切り離されたことわざの意味をポーランが尋ねても、誰一人として答えてくれないのである。実際に「道端にヒバリの卵。とがむべきは私ではなく、ヒバリである *œuf d'alouette au bord de la route ; ce n'est pas moi le coupable, c'est l'alouette*<sup>(38)</sup>」ということわざの意味を尋ねたときには、「でも、それどこで聞いたの？何の話だった？<sup>(39)</sup>」と質問を返されたという。それでもとにかく意味を教えてくれるように頼んだところ、そのマダガスカル人女性はことわざの解釈には一切触れずにそれを具体的な文脈の中に置いてただ示すにとどめた。

Voici, tu es marchand de Rafia. Tu viens au marché ; ton premier client, c'est un paysan qui ne connaît pas la valeur de choses. Le prix que tu lui demandes, quand ce serait dix piastres, il le donne. Et ton voisin te dit : « Ce n'est pas bien, tu voles ce pauvre homme. » Alors toi : « Tu plaisantes, c'est sa bête qui l'a volé. *œuf d'alouette au bord de la route ; ce n'est pas moi le coupable, c'est l'alouette.*<sup>(40)</sup>

あなたはラフィア売りの商人で、市場に来ているの。最初のお客さんは、ものの価値をよく知らない農民。あなたが彼に要求した値段は10ピアストルだったんだけど、彼はその通り支払った。それで隣の人があるにこう言う。「良くないなあ。気の毒な彼を騙したね。」それであなたはこう言うの。「冗談言わないでくれ、あいつが間抜けだから盗まれるんだ。道端のヒバリの卵。とがむべきは私ではなく、ヒバリである。」

つまりマダガスカルでは、ことわざは伝統的に受け継がれ頻繁に使用されるものであるにもかか

ならず、その意味は決して固定されることがないという、容易には理解しがたい事態が起きているのだ。そこでは、ことわざは決して形骸化し記号化することはない。おそらく彼らはいつでも、そのことわざを始めて知ったときのように、多義性に開かれた謎としてそれを捉える努力をしているのだろう。というのも、議論において自分の立場を守るために使ったことのあることわざで、それによって論争に勝利したならばなおさら、当時の自分の解釈にこだわりたくなるだろうことは容易に想像がつくからである。文脈から切り離れたことわざを解釈しないというのはだから、いわば、匿名的なことわざを所有してしまうことなく謙虚であり続けるための彼らの知恵と言うことができるかもしれない。

では、そのように謙虚でありながら、意見の対立する場においてことわざを自分の立場から使用するとき、いったい何が起きているのだろうか。それはことわざの持つ多様な意味の潜在性、すなわちその匿名性を無視して、自分にとって都合の良い解釈を盲目的に見出すことと何が違うのだろうか。注目したいのは、ポーランがことわざの意味を「発明」として捉え直したことだ。

*Il semble que le sens ne soit pas ici un fait stable, simple, donné avec le proverbe, mais à propos de ce proverbe une invention et comme un exercice.<sup>(41)</sup>*

意味はここでは、固定された単純な事実で、ことわざと一緒に与えられるものではなく、ことわざについての発明や訓練のようなものであると思われる。

つまりことわざの意味は、ことわざに対して固定されていないというだけでなく、使い手にとってもまた、すでに意識されている信条や欲望の投影ではなくて、いわばことわざと出会うことでその都度生じてくるようなものなのだ。マダガスカル人たちも、初めのうちことわざに自分の信条を投影してしまうことがあるとしても、上述した通り、ことわざそれ自身の不透明性のほうに注目するよう努力する。ことわざは解釈を誘うような魅力の強い言葉であるだけに、この努力がよりいっそう骨の折れるものであることは容易に想像できよう。そうして、解釈を誘いつつも常に多義性に開かれていることわざの不思議さを感じながら、その上で自分の文脈においてそのことわざを使うことを選ぶのである。ただし、議論において使用することわざを選ぶのは、ほかの誰でもない自分なのだが、それが良い選択であった場合には決まって「自分が消え去る」のだ<sup>(42)</sup>とポーランは証言している。つまり、主体にとってその選択はいわば一種の賭けなのだ。個人の手には余るはずの不思議なことわざを扱うのだから、結果がどうなるのか使い手には分からないはずなのである。しかしそれと同時に、その「真実性」を「確信」してしまうような選択でもある。

*Ainsi devais-je remarquer que mon assurance me paraissait due, non pas à mon proverbe, mais à la vérité des événements que je citais. La raison en est simple : c'est que je ne voulais plus tenir ce proverbe que pour un événement vrai.<sup>(43)</sup>*

自分の確信はことわざに起因するのではなくて、引用した出来事の実真性に起因するように思われた

ことに、私はこのようにして気付いたのだった。その理由は単純だ。ことわざをもはや真の出来事以外のものとして捉えなくなかったからだ。

説明できないのに、なぜかそのことわざが適当だと分かってしまうのである。ことわざの意味もだから、使い手の予期しなかったものとして発明されるのだが、次の瞬間には自分のものであると納得するようなものである。つまりこのような意味こそが、上述した「訓練」の成果なのだ。

まずこのようにして、使い手はことわざを発する前に自分自身で「確信」を得るはずである。なぜならポーランによれば、まず自分一人で「確信」することが、ことわざを実際に使って成功するための条件だからだ<sup>(44)</sup>。おそらく「確信」を伴って発声されたことわざは、聞き手の目の前で「変転 *retournement*」あるいは「変形 *transformation*」してみせることができるということなのだろう。すなわち、論争中であればなおさら聞き手は、論敵である相手の使うことわざを自分に都合よく解釈したくなってしまはずだが、その解釈の完全な成立を妨げてしまうほどに、聞き手にとってそれは意外な、理解しがたいことわざの使い方なのである。言い換えるなら、聞き手がどれほど自分の解釈の正当性に自信を持とうとも、そしてそれが実際にある意味で正当なものであろうとも、その幻想を突き崩すほどに、聞き手も慣れ親しんでいるはずのことわざが想像もつかないような意外な意味へと遂げる「変形」があまりに「強力」で魅力的なので、聞き手は自身の意見を放棄して論敵の使うことわざのほうに自然と耳を傾ける。したがって、この「変形」こそが、言葉の持つ聞かせる力なのだ。

Tout se passe comme si le retournement, ou plutôt la transformation que l'on a vue, donnait à son auteur quelque mérite. Elle est difficile, sans doute, et ne réussit pas toujours. Mais il y a plus : elle semble encore grave, pressante au point que chacun des interlocuteurs, délaissent un instant son opinion propre, s'y trouve intéressé.<sup>(45)</sup>  
この変転、あるいはむしろ変形が、作り手に何らかのメリットを与えるかのように全てが進行している。変形は難しいし、いつもうまくいくわけではないだろう。しかしそれ以上のものがある。変形はいつそう深刻で逆らいがたく、話し相手のうちのそれぞれが少しの間自分自身の意見を放棄し、その変形の方を興味深いと考えるほどである。

言葉の「変転」あるいは「変形」は、容易には起こり得ない。それは、言葉があらかじめ定められ共有された意味を持つことでもなく、聞き手の慣れ親しんだ解釈の通りになることでもなく、聞き手には想像もつかないような他人の与えた意味を示してくれるという、驚くべき事態なのだ。つまり、言葉は通常、それが呼び出す意味に取って代わられて消失してしまうのだが、ここでは言葉が残り続けたまま意味を獲得していくのである。言い換えれば、言葉は聞き手にとって単なる言葉でなくなり、それがあたかも「存在」<sup>(46)</sup>しているかのように思わず本当のことだと信じてしまうのだが、信じる当人の欲望が言葉に投影されているに過ぎない通常の場合とは異なり、ここでは、聞き手は他人の考えとして言葉の「存在」を信じている。言葉と意味との間に、いわば

捻じれが起きているのだ。これが「変転」および「変形」の内実である。こうした「変転」は独りだに起こる。これは語り手が、独断を避け、ことわざの不透明性を尊重しながらその意味を発明し、確信を得たために可能になったことだ。そうでなければ、語り手のいかなる意思も介在できないところで、ことわざが彼の信じる意味を聞き手に示してくれることはないのである。したがって、言葉の持つ聞かせる力とは「変転」および「変形」のことであり、それは語り手の行う、絶対的に一致することのないはずの匿名的なことわざと自身の考えを、両者のいずれにも還元することなくして結びつけるという、極めて厳しい努力が可能にするものであった。それは言い換えるなら、ことわざを形骸化した生気のない記号としてではなく多様な意味の可能性を秘めた謎として捉え、なおかつ、すでに意識化されて安定した自身の考えに固執せず、むしろそれを手放し謎であることわざと関係させるよう努力すること、そしてその結果、図らずも発明できてしまう誰のものでもないような考えが、理由は説明できないけれどもなぜか自分のものでもあり「確信」することに成功して初めて可能になるものである。

このようにして語り手の到達する「確信」は、誰の目から見ても明らかな不動のものではなく、どうしても説明のつかないものであるという、震えてしまうような一抹の不安を語り手自身に抱かせる。つまりそれはたしかに「確信」なのだが、常に主観的な思い込みでしかない可能性を、語り手自身が自覚せざるを得ない危うさを伴っている。それでも「確信」していることを確かめながら発せられたことわざだからこそ、いわばその震えを保存したまま、「変形」を提示する力を帯びるのだ。聞き手はだから、その力に巻き込まれる。そして「変形」しようとすることわざに注目するため、語り手の発明した意味を共有することはできなくても、ことわざの「変形」する先に自分の考えと異なるそれがあることを認めるのである。その考えの内実は明らかにならなくても、それは、それとことわざの間の、捻じれた隔たり、とでも言うしかない距離として示される。その距離を、まず共有可能なことわざから始めて、共有しえないはずの語り手の考えへ、その移行を追っていく仕方、聞き手は感知する。つまりそれは、ことわざが他人の与えるリアリティーを帯びていく様子を、それを想像できないはずの自分がなぜか間接的に感知できてしまうという事態でもある。そしてそれは聞き手にとってもまた、理由は分からないけれども本当にそうであろうと「確信」できてしまうということなのだ。

ただし、語り手もまた聞き手と同様に、自分の発したことわざの行方を追っていることを忘れてはならない。実際に論敵にそれを投げかけてみて、不安混じりの自らの「確信」が独断的でないかどうか判明するのである。語り手も一時的に聞き手となって、自分の発したことわざの「変形」を観察しながら確認し、なおかつ、論敵の「確信」も感じ取る。それによって、語り手一人のものだった「確信」が、論敵と、場合によっては聴衆も含めた複数人の「確信」によって確かめられることになる。主観的なものにとどまるはずの「確信」が、複数人によってほぼ同時に抱かれており、そのことを互いに察知し合うのである。語り手のことわざの「成功」時には、自然と論戦が止まるのだという<sup>(47)</sup>。聞き手が語り手によって説得されるというのは、こうした事態のことであるは

ずだ。

以上の考察を踏まえれば、次のようなポーランの結論を検討することが可能になるだろう。『ことわざの経験』の最後で、ことわざに聞かせる力を付与することのできない「不器用さ」は、以下のように結論づけられる。

Si l'on voulait nommer cette maladresse, il viendrait à peu près ceci : certains mots doivent être tenus pour les choses.<sup>(48)</sup>

この不器用さを名付けようとするならば、それはおおよそ次のようになるだろう。言葉のなかには、事物として捉えられなければならないようなものがある、ということである。

ポーランによれば「事物」とは、とりわけ「特異な事物で、『語る』よう迫るもの、可能な限り正確に語るよう迫るもの」<sup>(49)</sup>である。つまりそれは、通常は言語の反対物と考えられるような、疑いようのないリアリティーを帯びた事物のことである。そうであるなら、言葉を事物として捉えるということは、先述の通り、言葉がまるで事物であるかのように、それにリアリティーを見出すことだと言えるだろう。ただし、ポーランは明記していないが、リアリティーを見出すよりも前にまず、言葉を不透明なものとして捉える努力が必要であることを忘れてはならない。その理由を繰り返すなら、そうでなければ、言葉にリアリティーを見出したことにはならず、主体の幻想の投影にとどまり、言葉は単なる透明なスクリーンとなってしまうからだ。言葉を事物として捉えるということはだから、不透明な言葉であるにもかかわらず、それにリアリティーを見出そうとする努力のことだと思われる。この努力の達成における「不器用さ」を克服して初めて、言葉は「威信」を帯び、聞かせる力を持つようになるのである。

注目したいのは、言葉に聞かせる力を与えようとして陥るこうした「不器用さ」について、『ことわざの経験』の冒頭では、「マダガスカル語に固有のものか、あるいはすべての言語に共通するものか」<sup>(50)</sup> 問わないと述べられているのだが、結論部分では一転して、それがマダガスカル語に特有の困難ではないと指摘されていることだ。

Il faudrait dire en ce cas que ma première maladresse m'a mis sur la voie d'une maladresse plus générale, et inhérente peut-être à tout langage.<sup>(51)</sup>

今回述べておく必要があるのは、私の最初の不器用さが、より一般的で、おそらくすべての言語に本来属している不器用さへの手がかりを与えたということであろう。

したがって 1925 年時点での彼の結論は、一般的に重要な問題へと収斂してしまう。マダガスカルにおける経験の特殊性を価値づけるには至っていないのである。

## 終わりに

上述した「不器用さ」は、マダガスカル人と思考も感情も共有できるようになったポーランが、最後まで克服できずに悩み続けた彼らとの違いだったこと<sup>(52)</sup>を思い出すなら、『ことわざの経験』は、マダガスカル人にできる限り近づこうとする仕方では彼らを理解しようという、ポーランの努力を記したエッセイだったと考えて良いだろう。

それに対して、14年後の1939年に公表された『ハインテーニ』は、『ことわざの経験』で述べたような接近の先で見えてきた、彼らとの違いを明らかにすることに成功したエッセイとして位置づけられるだろう。このエッセイでポーランが検討したかった重要なことのうち一つは、おそらく、異邦人である彼が視線を向けるべきマダガスカル人の特異性である。

Lorsqu'il m'arrive de chercher aujourd'hui les raisons de la confiance et de l'admiration même que je portais aux Malgaches, dont je partageais en ce temps la vie, les travaux et les soucis, je n'en trouve pas une qui me semble tout à fait satisfaisante.<sup>(53)</sup>

当時、その生活や仕事、それに心配事を共有していたマダガスカル人たちに対して私が抱いていた信頼や賞賛そのものの理由を、今日突き止めようとしても、完全に満足できるような理由を見つけれないでいる。

ポーランは「賞賛」すべき彼らの性質として、「精神の繊細さ」、「優しさ」、「習俗の自由度の高さ」そして「配慮と礼儀正しさを中心とする倫理」の4点を列挙し、これをある慣習が象徴していると指摘している<sup>(54)</sup>。その慣習こそ、まさしく『ことわざの経験』において検討してきたような「詩的決闘 les duels poétiques」なのだ。

つまりポーランによれば、彼のマダガスカル人に対する「賞賛」は、「文明人」の側に位置付けられるはずのヨーロッパ人が「野蛮」になり、「未開人」に分類されるはずのマダガスカル人が「文明的」になるような視点<sup>(55)</sup>において可能になっていたという。それは、レヴィ＝ブリュールやフレイザー、デュルケームによると「未開人」には無縁のものとされてきた問題、すなわち、ある一つの共同体における信条の多様性の問題を、「未開社会」にとってもまた切実なものとして捉える視点である。

[...] leur défaut commun me paraissait tenir à ce qu'elles commencent par admettre que les primitifs sont à la fois plus semblables les uns aux autres et plus simple intérieurement que les civilisés. [...] Mais vivant auprès des Malgaches, c'était au contraire leurs différences, leurs écarts, leur variété et — dans l'ordre des croyances — leur scepticisme, qui me retenaient d'abord.<sup>(56)</sup>

[...] それら [教義] に共通する欠陥は、そのどれもが、未開人が文明人よりも全員似通っていて、内的に単純であると認めることから始めていることに起因しているように思われた。[...] しかしマ

ダガスカル人のそばで暮らしていると、反対に、彼らの違いや隔たり、多様さ、それから信仰の秩序における彼らの懐疑的態度こそが、私をまず初めに魅了したのだった。

こうした共同体内部に潜む違いが衝突するとき、マダガスカルにおいてもしばしば武力行使を伴う闘いは起きたようだ。18世紀末の「ベタフォの闘い la bataille de Betafo」はメリナ族とベツイレオ族の衝突であるが、これを記録したフランス人の旅行者デュマルテルによると、5日間で5人の負傷者を出したことが両族を震撼させたという<sup>(57)</sup>。すでに第一次世界大戦を経験し、第二次世界大戦が始まろうとしていた時期にこのエッセイを公表したポーランは、皮肉を込めて次のように述べる。

Il nous est difficile aujourd'hui — tant notre application s'est portée [...] à obtenir des morts et des blessés, presque sans combat — d'imaginer ce que pouvaient être de telles batailles.<sup>(58)</sup>

今日、私たちにとって困難なのは、——それほどに私たちの実践が、[...] 死者と負傷者をほとんど戦闘行為なくして得ようとするものだったのだから——こうした闘いがどんなものであり得たかを想像することである。

つまりここではヨーロッパ人の方がむしろ「野蛮」になり、マダガスカルの方が「文明」的になるということなのだ。こうして「未開人」と「文明人」の対立が無効になるところで、ポーランはマダガスカル人を理解しようとした。そこでは、ヨーロッパという文脈を背負うポーランにとってもまた、やはりマダガスカルの「詩的決闘」という文化は、共同体内部で生じた信条の衝突を調停する方法として、紛れもなく「特異な慣習 une coutume singulière」であった。そしてそれは「賞賛」すべき一つの異なる文化なのである。

さらに、それは『ことわざの経験』において確認できるように、「不器用さ」の克服の末に到達した言葉の力が、いかに機能しているかという問いに対する答えに該当するはずだ。異なる信条を持つ者同士の争いは、言葉の力を借りることで調停可能になるのである。言葉、とりわけことわざにその力を発揮させるためには、ポーランも苦勞したように訓練が必要であることを考えれば、ハインターニが彼によって「teny 言葉」の「hain 学問」と訳されたことにも頷けるだろう。したがって、こうした特異な言葉の使い方こそが、ポーランのマダガスカルにおける発見だったと思われる。

## 注

- (1) ポーランは計7回講演を行ったことがあるが、すべてマダガスカルの詩に関連するものであった。  
Cf: « Paulhan n'a jamais fait de conférence qu'à partir de la poésie. », Jean Paulhan, *Œuvres complètes* tome II, Gallimard, 2009, p. 27.

- (2) Cf : Jean Paulhan, *La vie est pleine de choses redoutables*, Seghers, 1989, p. 198.
- (3) 中国のほかにギリシャのサロニカやカイロへの渡航も検討していた。Cf : Jean Paulhan, *Cahier Jean Paulhan 2*, Gallimard, 1982, p. 19.
- (4) フランス語、ドイツ語、ラテン語、歴史、地理、体育を教えていた。Cf : Jean Paulhan, *La vie est pleine de choses redoutables*, op. cit., 1989, p. 137.
- (5) マダガスカルに到着したばかりの 1908 年 2 月 13 日、母ジャンヌに次のように書き送っている。「Tu crois que j'avais une raison sérieuse de partir? [...] Simplement je voulais gagner cette année assez d'argent pour commencer à préparer ma thèse. », Jean Paulhan, *Cahier Jean Paulhan 2*, op. cit., p. 19.
- (6) 「父親と同じ道かさもなくば逃走としての旅という二者択一」、深澤秀夫「言葉への旅——ジャン・ポーランのマダガスカル」、『文化解体の想像力』、人文書院、2000 年、p. 322.
- (7) 後年書かれた『勤勉な兵士』の一部であり、ポーラン自身の話とは区別される必要がある。ただし、レシの語り手は Masst、学位論文の草稿の署名は Maas であるという類似点を Bernard Baillaud は指摘している。Cf : Jean Paulhan, *Œuvres complètes* tome II, op. cit., p. 8.
- (8) Cf : Jean Paulhan, « Anarchie », dans *Œuvres complètes* tome IV, Cercle du Livre Précieux, 1969, p. 452.
- (9) *Cahier 2* の編者たちも以下のように述べている。「Pourquoi Jean Paulhan est-il parti? Pour se libérer de l'emprise familiale, s'éprouver, connaître l'aventure, voyager [...] ? Un peu pour toutes ces raisons sans doute, principalement cependant, pour pénétrer une autre forme de pensée par l'intermédiaire du langage. », Jean Paulhan, *Cahier Jean Paulhan 2*, op. cit., p. 19.
- (10) « Je ne sais pas trop ce que vaut un tel raisonnement. C'est le mien, c'est tout ce que j'en puis dire. Ou plus exactement, c'était le mien, lorsque je pris le parti vers seize ou dix-sept ans d'apprendre le chinois. », *ibid.*, p. 189.
- (11) *Ibid.*, p. 189.
- (12) « ces habitudes d'esprit qui est essentielle aux langues malgaches et malaises », *ibid.*, p. 179.
- (13) *Ibid.*, pp. 181-182.
- (14) « [...] le français m'est toujours apparu comme une langue étrangère. Je n'ai pas fini de l'apprendre. À l'inverse, le malgache m'a très vite paru *naturel*. Il m'est arrivé une aventure étrange : je me suis trouvé éloquent en langue malgache. En français, c'est tout le contraire. », Jean Paulhan, *Entretiens à la radio avec Robert Mallet*, Gallimard, 2002, p. 94.
- (15) *Ibid.*, p. 268. ポーランの学位論文「ことわざの意味論」の草稿。執筆時期は 1912 年かあるいは 1930 年代か、不明である。
- (16) « [...] la pratique d'une langue maternelle », *ibid.*, p. 268.
- (17) « je dus sans doute de connaître les phrases dans le même temps que les choses. », *ibid.*, p. 268.
- (18) *Ibid.*, p. 49.
- (19) « J'ai passé plusieurs années à Madagascar, demeurant dès le premier jour dans une famille malgache, dont je m'appliquais à partager les travaux et, plus que les travaux, les soucis et les pensées. Ce ne fut pas sans maladresse. », Jean Paulhan, *Œuvres complètes* tome II, op. cit., p. 169.
- (20) Cf : Jean Paulhan, *Cahier Jean Paulhan 2*, op. cit., p. 63.
- (21) Cf : *Ibid.*, p. 69.
- (22) Cf : *Ibid.*, p. 70.

- (23) Cf : « Elles [dossiers] expriment une déception devant le travail en cours, dénoncent l'illusion de « l'éclair » qui permettrait de le mener à son terme », Jean Paulhan, *Œuvres complètes* tome II, op. cit., p. 638.
- (24) Jean Paulhan, *La vie est pleine de choses redoutables*, op. cit., p. 198.
- (25) « 1<sup>er</sup> éclair : rayonnement de l'argument qui devient le proverbe », Jean Paulhan, *la vie est pleine de choses redoutables*, op. cit., p. 198.
- (26) « 2<sup>ème</sup> éclair : le sens est un fait composé, analysable », *ibid.*, p. 198.
- (27) 例えば、「嫁を貰おうと急ぐ。するとたちまち離婚する」というマダガスカルのことわざがあるが、これは論拠ではなく基本的事実であるとされている。その真偽は論理性によって決定できず、信じるか疑うかによって判断されるしかない。Cf : *ibid.*, p. 209.
- (28) « je les exposerai mal, puisque je ne les ai pas encore tout à fait débrouillées (ou bien : puisque je n'ai pas encore trouvé le point de leur difficulté la plus aiguë). », *ibid.*, p. 202.
- (29) « Me voici stupide. Exactement, je ne comprends plus ce qu'est un sens. », *ibid.*, p. 203.
- (30) ポーラン自身の予想通り 1936 年まで長引いたが、結局この論文が完成することはなかった。
- (31) Cf : « Non, surtout ne recommençons pas cette Sémantique », *ibid.*, p. 207., « tout irait, n'était la portée de la sémantique que l'on veut peut-être trop grande. », *ibid.*, p. 211.
- (32) Paul Éluard, Jean Paulhan, *Correspondance 1919-1944*, Édition Claire Paulhan, 2003, p. 31.
- (33) 「ことわざの意味論」は完成しなかったが、『ことわざの経験』を生み出した点において価値のある試みだったとバイユーは述べる。Cf : Jean Paulhan, *Œuvres complètes* tome II, op. cit., p. 27.
- (34) *Ibid.*, p. 169.
- (35) « Elles [mes paroles] me paraissaient privées de cette part d'elles-mêmes qui eût dû les faire accepter de qui m'écoutait. Toute discussion, si je la voulais soutenir, m'obligeait sévèrement à reconnaître que je savais exprimer mes pensées peut-être, mais non pas les imposer. », *ibid.*, p. 170.
- (36) Cf : *ibid.*, p. 171.
- (37) « le respect s'achète est un proverbe. Je ne m'en aperçois pas. », *ibid.*, p. 172.
- (38) Cf : *ibid.*, p. 176.
- (39) « Mais où l'as-tu entendu? De quoi s'agissait-il? », *ibid.*, p. 176.
- (40) *Ibid.*, pp. 176-177.
- (41) *Ibid.*, p. 192.
- (42) « Je m'efface volontiers devant le succès de ces paroles, je me retire, je demande presque que l'on m'excuse si je suis à tel point dans le vrai, je laisserais volontiers entendre que ce n'est pas ma faute, que ce sont les choses qui sont comme ça » *ibid.*, p. 186.
- (43) *Ibid.*, p. 192.
- (44) « [...] j'ai dû à mon assurance de dire le proverbe, non au proverbe de gagner mon assurance », *ibid.*, p. 186.
- (45) *Ibid.*, p. 194.
- (46) « lorsque je prononce le proverbe, ce n'est point une phrase que je place habilement, c'est une vérité dont j'affirme l'existence. », *ibid.*, p. 193.
- (47) Cf : *ibid.*, pp. 144-145.
- (48) *Ibid.*, p. 194.
- (49) « [...] ils sont encore des choses singulières, qu'il est urgent de dire, et de *dire* le plus exactement possible »,

*ibid.*, p. 194.

(50) « Si les difficultés, que me présentèrent en particulier les proverbes, sont propres à la langue malgache, ou communes à toutes les langues, je ne le chercherai pas ici. », *ibid.*, p. 169.

(51) *Ibid.*, p. 194.

(52) Cf : *ibid.*, p. 169.

(53) *Ibid.*, p. 143.

(54) « J'aurais volontiers défini les Malgaches par leur subtilité d'esprit, la douceur et la liberté de leurs mœurs, leur morale faite principalement de prévenances et de politesse. » *ibid.*, p. 144.

(55) Cf : *ibid.*, pp. 143-144.

(56) *Ibid.*, p. 143.

(57) Cf : *ibid.*, p. 144.

(58) *Ibid.*, p. 144.